



森と光が織りなすうるおいのまち伯耆町



# 家庭教育ハンドブック

後期編



～自分からすすんで学ぶ子どもを育てる～

監修／国立大学法人鳥取大学 副学長 矢部 敏昭

伯耆町教育委員会

## 監修に当たって

伯耆町教育委員会の努力により、ここに「家庭教育ハンドブック」が刊行されることを大変うれしく思います。輝く未来を生き抜く子ども達のために作られたこのハンドブックが、伯耆町のお子様を持っているご家族の家庭教育に生かされ、伯耆町の未来を担う子ども達の健やかな成長の一助になることを心から願うものであります。

子ども達の「自立」に向けて、この時期に大切なのは困難に打ち勝つ強い意志を身に付け寛容さを持つことです。それは、今まで家庭で培われてきた道徳観や倫理観を一度疑いつつ、子ども達は一段と広い社会の中で通用する価値観へと再び作り変える時期にあるからです。つまり、この時期の子ども達は大きな不安と困難を抱えながらも、納得できる自分の存在を自身で認められるように自分を作り変えます。

私たち大人が一人の社会人になる過程があったように、子ども達が大人になる道程には周囲の人々の寛容さと毅然とした態度が必要です。そして、誰もが乗り越えてきた大きな不安と困難を、子ども達もまた乗り越えられないはずがなく、必ずや乗り越えられる子ども達であると心底から認めながら、励ますことが必要と思われます。将来の夢や希望に向けて習慣化した一つひとつの事柄は、その後習慣が子ども達を育てます。

「自立」へ向けた過程は、子ども達の夢を実現するために強い意志と寛容さを持ち、子ども達が自分のあるべき姿を思い描きつつ、その理想とする素敵な姿を自ら追い求めることにつながると思われてなりません。

平成 28 年 12 月  
 国立大学法人鳥取大学  
 副学長 矢部 敏昭

### もくじ



・ 保護者のみなさまへ .....	3
・ 家庭教育のめざすところ .....	4
・ 中学校2年生 .....	6
・ 中学校3年生 .....	8
・ 中学校卒業後 .....	10
・ 伯耆町の学校教育 .....	12
・ 特 集 .....	14

## 保護者のみなさまへ

「心が安らく楽しい家庭」は、子ども達の成長にとってかけがえのないものであり、家族だれもが望んでいるものです。子ども達ができることが、ひとつずつ増えるたびに、家族みんなでよろこび合う、そんな笑顔があふれる家庭をだれもが求めています。

それに加えて、家庭は学校、地域社会とならんで、子ども達が育つための学びの場でもあります。子ども達は、生まれてから、家庭で最初に学び始め、その後もずっと家庭に帰ってから学びます。子ども達は、空気を吸うように、家庭からとても大きな影響を受けて成長していきます。その意味で、教育の原点は家庭にあるといわれています。

私たち大人は、子ども達の自立に向けて、家庭・学校・地域社会がスクラムをくんで、それぞれの役割を果たしていく必要があります。伯耆町の子ども達を、みんなで見守り、みんなで育てていきましょう。

この『家庭教育ハンドブック【後期編】』は、中学校2年生から義務教育修了後の子どもを持つ、保護者や家族の方を対象につくられました。【前期編】（小学校入学前～小学校4年生）、【中期編】（小学校5年生～中学校1年生）に続く完結編となります。

教育には、決してマニュアルはありません。みんなが手さぐりで子ども達と接しています。苦労はないとはいいませんが、子どもの成長を実感したときの喜びはひとしおです。この冊子を折にふれて開いていただき、少しでも子育てのヒントを読みとって、保護者のみなさまオリジナルの『家庭教育ハンドブック』をつくる助けとなればと願っています。

### お問い合わせ先

## 伯耆町教育委員会事務局

所在地 〒689-4292  
鳥取県西伯郡伯耆町溝口647  
電話番号 0859-62-0927  
ホームページ <http://www.houki-town.jp/>



# 家庭教育のめざすところ

## 家庭で自分からすすんで学ぶ子どもを育てる

大人になることは、「自立」することです。経済的な自立と同時に、精神的にも自立した人を「大人」といいます。「自立」するためには、多くのことを身につけなければなりません。そのために人は学びます。「学び」とは、狭い意味の勉強も含みますが、ここではもう少し広い意味があります。例えば、逆上がりができるように練習することも、友達との関係がうまくいくように考えることも、「学び」といえます。「学び」とは、今の自分に足りないこと、これからの自分に必要なことをわかったうえで、自分ができることを、新しくつけ加えていくことです。できることがつけ加わることも大切ですが、つけ加えるように努力するプロセスにも意味があります。学校教育を卒業し、「社会人」ともなると、自分からすすんで学ぶことが求められます。私たち大人は、自分からすすんで学べるように、子ども達を教育する必要があります。そして、子ども達が、「自立」に向けてどれくらい育っているのか、家庭での「学び」のようすを見ながら判断していくことが大切です。



### 学ぶ意欲を高める

「意欲」、「やる気」、「モチベーション」、いろいろないい方がありますが、自分からすすんで学ぶ子どもを育てるうえで、とても重要な要素です。学習意欲が高まるのは、主として次の3つのケースが考えられます。

- 1 学ぶことで、自分が信頼する人と関わりがもてるのがうれしい。
- 2 学ぶことで、わかること、できるようになることが楽しい。
- 3 学ぶことで身についたことが、自分にとって役に立つと信じている。

この①～③の3つがからまって、学ぶ意欲が高まっているのですが、この【後期編】で特に注目していくのは、③の役立ち感です。

この時期の子ども達は、その大多数が高校等への進学をきっかけに、自分の進路と直面します。それは、自分自身と世の中を同じところにおいて考える重要な時期です。社会人は、職業をもつだけでなく、主権者として政治にも参加し、さらに余暇を過ごします。この地域や社会の中で、学んだことをどういかし、どのように学び続けるか、身近な大人としてアドバイスをすることが大切です。

# 特集 人生はじめての進路選択

現在、本町の中学生はほぼ100%が高等学校等に進学をしています。進学をするのか、就職をするのか。進学をするにしてもどの学校を選ぶのか。中学校入学とともに、機会をとらえて考えさせる指導をしています。進路選択で大切なのは、生徒自身が将来の生き方や働き方について考え、自分の意思と責任で決めることだといわれています。

ところが、現在の中学生の全国的な課題としてあげられるのは、「誰かが決めてくれる」のを待つ生徒が目立ったり、進路選択を迫られると「入りたい高校」から「入れる高校」に安易に変更する姿が見られたりすることです。進学をしたとしても、他の人が決めた進路、安易に変更した進路は、違和感は小さくても続かないことが多いようです。

自らが進路選択をする力は、学校と家庭の両方でつけていく必要があります。「複数ある選択肢から適切なものを選ぶ」には、継続的に「選ぶ」訓練をしていく必要があるようです。また、自分自身のことに関心をもつこと、社会のことに関心をもつこと、そのために様々な体験をすることが、自分自身にとってよりよい選択につながります。そして、どのような選択にも理想と現実の格差があるのですが、それを乗り越えるのは、選択にあたってどれだけ真剣に悩んだかという経験です。親として、日頃から「選ぶ」経験をさせ、社会体験に連れ出し、悩みにつきあうことが大切です。



## 鳥取大学副学長 矢部敏昭教授がすすめる 「教育スタンダード 望ましい保護者のあり方」



- ・ 学校での様子や友達関係について、親子で会話する。
- ・ 勉強のしかたや成績について、いつも相談にのる。
- ・ 礼儀作法、秩序、道徳観について、いつも親子で話し合う。
- ・ 子どもの夢や将来について、いつも親子で話し合う。
- ・ 学習計画を子どもが立てられるように、いつも関わる。
- ・ 家族で共有する時間を持ち、家庭でのコミュニケーションを大切にしている。
- ・ 日常的に、家の手伝いや役割を子どもにもたせている。
- ・ 子どもが、自然にふれたり、体験したりする機会を定期的にもつようにしている。



栃原からの大山(栃原)  
撮影者:青戸智子

中学校

# 2年生



## 中学2年生の時期の特徴

- ・中学校生活に慣れてきて、見通しができて余裕をもって楽しめるようになるとともに、生活がゆるんでしまうことがあります。
- ・「第二反抗期」の時期であり、親の干渉からのがれ、独立しようとして、やたらと反抗することが多くなります。
- ・集団行事に対して、他人と協力し合って、チームワークよく積極的に参加するようになります。自分を客観的にみて、感情を抑えたりするようにもなります。
- ・友達関係などで悩むようになり、「人間とは、愛とは、死とは」といったテーマを深く考えるようになります。

## 伯耆町の子ども達が つまずきやすい学習ポイント

～過去の各種学力調査結果から～



### 国語

- 相手の立場や考えを尊重し、目的にそって話し合い、おたがいの発言を検討して自分の考えを広げることができる。
- 抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読むことができる。
- 文章全体と部分の関係、登場人物の言動の意味などを考え、内容を理解することができる。

### 数学

- 問題文とそれを解くための連立方程式をよみとり、「 $x$ 」と「 $y$ 」が何を表すのか指摘することができる。
- 文字式の乗法、除法の混じった計算ができる。
- 分数を含む多項式の減法の計算をすることができる。
- 平行四辺形になるための条件について理解している。

### 英語

- ポイントとなる語句や表現を正確に聞き取ることができる。
- 自分の身近な話題について、必要な情報を正しく伝えることができる。
- ポイントとなる語句や表現を正確に読み取ることができる。
- 文法を意識した正しい語順で文を書くことができる。

## 家庭学習の ポイント

### 学習時間のめやす110分～120分 自分から家庭学習に 取り組む子ども



「学問に王道なし」といいますが、毎日、決まった時間、こつこつと取り組む家庭学習が最も効率的かつ効果的です。復習もちろん大切ですが、予習に取り組むことで、あらかじめ「わからないこと」が意識でき、授業の内容がよりよく理解できるという効果があります。高校の授業では予習は欠かせません。この時期から予習の効果を自覚し、自主学習として取り組むことは、学習者として一生にわたる財産になります。

## 職場体験学習

本町の中学校では、2年生になると職場体験学習に出かけます。7月から8月にかけて、4～5日間の期間、自分が選んだ事業所で「働く」ことを体験する学習です。この期間の前後には、総合的な学習の時間をつかって、事前にマナーを学び、事業所との打ち合わせをし、事後には学習のまとめをつくり発表し合うなどの活動がおこなわれます。この学習を通して、「働く」ことの喜びとともに苦労の一部を実感し、自分の将来について考え、日頃の生活を見直す機会となることをねらっています。

この学習の前後に、職業人の先輩として、家庭でも話をしていただきたいと思います。社会に出る前に最低限身につけておくべきマナー、周囲の人への接し方をはじめ、どのような職業に適正があるか、将来どのような希望をもっているか等にも踏みこんでいけるチャンスではないかと思います。子ども達が聞く耳をもっているこの時期をのがさないようにしてください。



「酒・タバコぐらい  
大したことはない」  
と思っていないか



20歳までは、心と身体の成長のために特に大切な時期です。未成年者は急性アルコール中毒になりやすく、未成年でタバコを吸い始めた人は、大人になってから吸い始めた人よりも肺がんになりやすいなど、子どもの飲酒、喫煙の危険性は医学的に明らかになっています。また、飲酒、喫煙が薬物乱用につながる傾向も指摘されています。

親は、子どもの飲酒、喫煙から目をそむけたり、大したことはないと許したりせず、きちんと注意し、法律で禁止されていること、身体に害があることを、子どもが納得するようによく話し合しましょう。



地蔵滝の泉(丸山)  
撮影者:後藤 栄



中学校

# 3年生



## 中学3年生の時期の特徴

- ・自分の進学や就職など、進路選択に向かって重圧を感じる場合があります。
- ・「やらなくては」と分かっているが、思うようにならない自分に苛立ちをおぼえる場合があります。
- ・気持ちの安定が見られ、まわりを意識して行動するようになります。
- ・自分の将来を考えるとともに、身近な地域をはじめ社会全体について意識するようになり、地域のためにできることについて考えるようになります。

## 伯耆町の子ども達が つまずきやすい学習ポイント

～過去の各種学力調査結果から～



### 国語

- 話し合いが効果的に展開するように進行のしかたを工夫し、課題の解決に向けて、おたがいの考えを生かすことができる。
- 文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に着目して読むことができる。
- 文章の論理の展開のしかた、場面や登場人物の設定のしかたを、内容の理解に役立てることができる。
- 歴史的な背景をふまえて古典を読み、その世界に親しむことができる。

### 数学

- 因数分解したり、平方の形に変形したりして、二次方程式を解くことができる。
- 解の公式を理解して、それを用いて二次方程式を解くことができる。
- 図形の基本的な性質を論理的に確かめることができる。
- 三平方の定理の意味を理解し、それを証明できる。
- 関数  $y = ax^2$  について、表、式、グラフを相互に関連づけて理解している。

### 英語

- 文章を正確に聞き取り、要点をまとめることができる。
- 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすることができる。
- 文章を正確に読み取り、要点をまとめることができる。
- まとまりのある文章で説明することができる。

### 家庭学習の ポイント

学習時間のめやす2時間～3時間  
自分から家庭学習に  
取り組む子ども



保護者  
チェック欄

中学校3年生になると、定期テストに加えて毎月のように実力テストが行われ、高校選択のための重要なデータとされます。高校入試は、中学校で学習した全ての内容が範囲となるので、新しいことを授業で習いながら、1・2年生の復習をする必要があります。そこで重要なのが、入試に向けての年間スケジュールです。「基礎確認期」や「苦手克服期」などその時期の重点を決めて、割り振っていくことです。スケジュールができると、気持ちが安定します。また、どの程度できたかをチェックすれば、自分の状態を確認することができます。長期にわたるスケジュール管理は大人になってからも必要なことです。

## この時期だからこそ あいさつや会話を大切に

思春期という不安定な時期であるうえに、友人関係の悩み、部活動でのあせり、進路への不安などをかかえて、浮かない表情を見ることが多く、とつきにくい時期だと思えます。それでも、「おはよう」「ただいま」「ありがとう」などの基本的なあいさつを忘れないように接していきましょう。気分によっては、返事が返ってこないこともあるかもしれませんが、必ず耳には入っています。

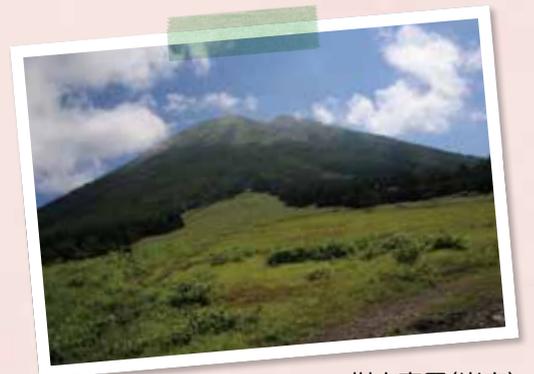


また、普段から子どもとの会話を大切にしましょう。その中で、子どもの変化に気がついたり、子どもと話しやすい雰囲気をつくったりすることができます。特にこの時期は、大事な進路選択をひかえています。進路選択では親子の話し合いが欠かせません。それぞれの思いを出し合いながら考えていくことが必要です。「あなたの好きにきなさい」は温かいようで、「自分のことを真剣に考えてもらっているのだろうか」という思いにさせることもあります。会話をするとは、自分で最終決定をするための土台づくりになります。

## 生きていること自体が幸せ

多くの自然災害や事件、事故が報道されるたびに、幸せになるのに必要なのは、あたりまえの生活の中ですでにある幸せに気づき、感謝し、それを味わうことだと気づかれます。

ピンチのときこそ家族の絆が試されます。そして、命の尊さを実感します。困難にであったときのことを想像し、家族で話し合うとともに、思いやりのある行動をいっしょにすることが家族の絆を一層強くするのです。



榎水高原(岩立)  
撮影者:後藤 栄

中学校

# 卒業後



## 中学校卒業後の時期の特徴

- ・親の保護のもとから、社会へ参画し貢献する、自立した大人となるための最終的な移行時期です。
- ・思春期の混乱から脱して、大人の社会を展望するようになり、大人の社会でどのように生きるかという課題に対して、真剣に向き合う時期です。
- ・中学生の時期よりも行動範囲は大きく広がり、新たな出会いによって交友関係も広がります。そのような中で、新たな自分の可能性を発見したい、これまでとは違う自分を見せたいという欲求も出てきます。

## 「主権者教育」 18歳から選挙権

平成 27 年に改正公職選挙法が成立し、満 18 歳以上の全ての国民が選挙権をもつこととなりました。小中学校では選挙制度のあらましを学び、高校等では模擬選挙などを行って体験的に選挙について学ぶ学習活動が展開されています。それらをまとめて「主権者教育」とよんでいます。

近年の国政選挙の投票率をみると、若い年齢層ほど低い傾向が明らかになっています。つまり「若者が選挙に行かない」ということです。選挙に行かないことについては、「政治に関心がない」「意見が反映されない」など、さまざまな理由が口にされますが、果たしてそれでよいのでしょうか。

学校教育では、選挙に行き、自分の考えにもとづいて投票する主権者の育成を目指しています。実際に行動する子どもを育てることについて、家庭教育は大きな役割をもっています。いくら学校で学習しても、選挙に行かない家族の様子を見つづけたら、政治について「どうでもよい」とつぶやく声を聞きつづけたら、その先の行動は想像に難くないものがあります。

選挙期間になったら候補者や政党の政策について家族で話題にし、投票日には胸を張って投票所に足を運ぶ姿を見せていくことが大切です。



# 「情報モラル」

## 情報機器とのつきあい方

高校の合格発表の前後、携帯電話販売店の店頭にあふれている親子の姿は恒例のものとなりました。中学生のときまでは持込を禁止されていた携帯電話を片手にして、中学校を訪れる高校生の姿もあたり前になっています。しかし、携帯電話等の所持率が上がるこの時期こそ、もう一度、情報モラルについて確認するときだと思えます。

「高校生ともなると塾や部活動で帰りが遅くなり、携帯電話は生活に欠かせない。」本町の中学生は例外なく町外の高校等に進学しますので、この言葉は、ある意味納得できる面があります。しかし、スマートフォン等のインターネット機能まで必要なのでしょうか。メールやラインをどのように使い、どのような人とつながっているのかが把握しきれぬのでしょうか。さらに、ネット上のトラブルに巻き込まれたとき、その対処法を日頃から親子で話し合っているのでしょうか。

情報機器を丸投げで子ども達にあたえることはやめましょう。あたえる前にはきちんとルールを決め、その後も定期的にチェックすることが必要です。そして、子ども達が問題に直面した時に、問題が小さいうちに相談できるような親子関係であることが大切です。



## 新しい時代と社会を生き抜く人へ

2030年ごろの将来、社会はどのようになっているのでしょうか。

子ども達がつくことになる職種は、技術革新等の影響により大きく変化することになると予測されています。「子ども達の65%は、今は存在していない職業につく」「今後10年から20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」といった予測がそれです。

また、グローバル化により、多様な文化をもつ隣人と共に暮らすことも予想されます。共に暮らすということは、そこで生まれてくる様々な課題に対して、相手の意見を聴き、自分の意見を伝えて、おたがいに変わりながら新たな解決策をさぐるということです。それこそが真の意味で「対話」だという人がいます。

これからの技術革新、情報化、グローバル化等の変化は、全ての子ども達に影響をあたえると考えます。答えが見つからない課題にも主体性をもって取り組み、自立性のある社会人として他者と対話を重ねながら、新たな可能性を見出そうとする「開かれた」人づくりが求められています。



上野堤からの町民の森(上野)  
撮影者:後藤 栄

# 伯耆町の学校教育

## 「地域とともにある学校づくりを 基盤とした保小中一貫教育の推進」

本町の小中学校の教育のキーワードは、「保小中一貫教育」と「コミュニティ・スクール」です。この2つについて保護者の皆様にもご理解をいただきたいと思います。

### 「保小中一貫教育」

本町の2つの中学校区（岸本中学校区・溝口中学校区）では、保育所、小学校、中学校の保育士・教職員が話し合いをもち、義務教育修了までにどのような子どもを育てるのか（これを「目指す人間像」と呼びます）を共有して、日々の保育・教育に取り組もうとしています。特に、小学校と中学校では、どの時期に、どのような内容を、どのような方法で教えるのか（これを「一貫カリキュラム」と呼びます）について、おたがいに理解しあった上で、学力がより確実に定着するための工夫をして授業を行っています。また、総合的な学習の時間をつかって、地域のことについて学ぶ「地域学習」と自分の生き方について学ぶ「生き方学習」（これらをあわせて「伯耆I学習」と呼びます）を、各学校で共通して実施しています。広い意味での学力である人間力を育てようとするねらいがあります。このように、保育所から義務教育9年間を通して、一貫性をもった教育を行うことから、保小中一貫教育といわれています。

### 「コミュニティ・スクール（CS）」

平成30年度から、本町のすべての小中学校がコミュニティ・スクールに指定されます。学校は、校長を中心として運営されていくのですが、そこに保護者や地域の方々、専門的知識をもつ方々の視点を取り入れていくのがコミュニティ・スクールです。複数のメンバーで構成される学校運営協議会が設置され、校長の運営方針について協議し、承認を行います。また、教職員人事について意見を述べることもできるしくみになっています。本町では、学校が抱える課題について話し合ったり、学校に対して地域や保護者の方々がどのように協力できるのかを話し合ったりすることが行われています。コミュニティ・スクールは「地域とともにある学校づくり」の中心となる取組です。

他にも、本町には次のような組織があります。

## 「伯耆町CSネットワーク会議」

各コミュニティ・スクール（CS）の間の横のつながりを形づくるために、中学校区ごとに3校ずつで、中学校区CSネットワーク会議を開いています。各学校の学校運営協議会の代表者3名ずつが集まり、中学校区の「目指す人間像」を共有し、その実現に向けて話し合いを行います。さらには、2つの中学校区を超えて取組について情報交換を行い、伯耆町全体としての「目指す人間像」を共有していくために、各中学校区のネットワーク会議のメンバーで、伯耆町CSネットワーク会議を組織しています。コミュニティ・スクールの取組の中に、保小中一貫教育の視点を取り入れて、地域総ぐるみで子ども達の育ちを支えていくことをねらっています。

## 「学校支援地域本部」

本町の学校では、多くの地域ボランティアの方が、授業で子ども達に関わったり、登下校で子ども達を見守ってくださったりしています。このような学校教育を地域の方々が支えてくださる組織を学校支援地域本部とよんでいます。地域ボランティアの方はそれぞれの得意分野で登録をいただいています。その中から、学校の要望に応じて支援をしていただくわけですが、学校と地域ボランティアの間をとりもって調整をする役割が必要になります。それがコーディネーターです。現在、教育委員会事務局に地域コーディネーターを1名配置し、各学校にも1名ずつの学校支援コーディネーターを配置しています。今後は、学校と地域がお互いに支援・貢献できるようなパートナーとなる方向を考えています。

## 「家庭教育支援チーム」

保育所から中学校までの幅広い保護者の皆様に、家庭教育の役割について再確認していただき、子ども達の育ちに積極的に関わっていただくために、家庭教育支援チームが組織されています。福祉課と教育委員会事務局が連携しながら、家庭における子育てについてさまざまな視点からアドバイスを行うこととしています。構成メンバーも、家庭教育推進員、保健師、子育て支援センター・教育支援センター職員、スクール・ソーシャル・ワーカー、スクール・カウンセラーと専門的な職能をもっています。

## 特集

各種全国調査からみた  
本町の生徒の特徴

子ども達の学力と体力の状況をつかみ、今後の施策にいかすための全国調査が毎年行われています。中学校においては、2年生で『全国体力・運動能力、運動習慣等調査』が、3年生で『全国学力・学習状況調査』が実施されます。それぞれの調査には質問紙による調査もあり、子ども達が自らの生活等について回答します。年によって子ども達の実態は変わりますが、過去6年間の全国平均との比較によってみてきた本町の子ども達の特徴についてピックアップしました。あくまでも「傾向」といったところのデータであり、学校や家庭、地域で子ども達の様子をみるときの目安としてとらえていただきたいと思います。



『全国学力・学習状況調査』の質問紙調査から

## マイナス傾向が強い質問項目

※（ ）内は平成27年度

- ・ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがありますか。(93.3%)
- ・学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾等を含む)。(2時間以上15.5%)
- ・土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾等を含む)。(3時間以上12.2%)
- ・家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。(40.0%)
- ・家で学校の授業の復習をしていますか。(35.6%)

家庭学習に関する質問項目で、全国平均にとどいていない傾向が顕著です。特に、普段も学校が休みの日も、一定の時間以上の家庭学習を行っている生徒が全国平均と比較して少ないことが大きな課題です。また、自立した子ども達を育てる観点からすれば、「自分で計画を立てて勉強をする」生徒の割合が大きくなることをめざして取り組むことが必要です。

# プラス傾向が強い質問項目

※ ( ) 内は平成 27 年度



- ・朝食を毎日食べていますか。(97.8%)
- ・毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。(75.6%)
- ・難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦していますか。(68.9%)
- ・普段(月～金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか。  
(1時間以上 51.2%)
- ・学校の授業以外に、普段(月～金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか。  
(30分以上 36.7%)
- ・本を読んだり、借りたりするために、学校図書館や地域の図書館へどれくらい行きますか。  
(週に1回以上 26.7%)
- ・今、住んでいる地域の行事に参加していますか。(63.4%)
- ・新聞を読んでいますか。(週に1回以上 27.7%)

朝食を毎日食べること、同じくらいの時刻に寝ることについては、数値が高く良い傾向にあります。読書の時間や図書館へ行く回数も多く、読書への関心が高いことが見えます。中学生になっても地域の行事に参加している生徒が多く、地域との絆の強さがうかがわれます。

実技調査  
として次の8種目が  
行われます。

## 『全国体力・運動能力、運動習慣調査』から

握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、  
50m走、立ち幅とび、ハンドボール投げ

過去2年間の2年生の結果をみると、男子については、全国平均をこえた種目が少ない傾向にありました。また、女子については、平均3種目程度は全国平均をこえる種目がありました。中でも、「長座体前屈」と「立ち幅とび」は、連続して全国平均をこえました。

本町の児童・生徒の体力・運動能力の数値が低い傾向にあることは否定できない事実であり、学校でも体力向上推進計画をつくって取組をすすめているところです。同じ学年を追跡してみたときに、小学校低学年、中学年までは全国平均をこえる種目が目立っていても、高学年になったとたんに激減するケースが多くあります。小学校からの継続的な取組の積み重ねが基礎体力を養い、それが中学校での体力向上につながる面はあるようです。しかし、中学生ともなれば、自分の体力面の弱さを自覚して、自主的に補うようにトレーニングをすることも可能です。家族で声をかけ合って、家庭での体力づくりを進めていくこともよいのではないのでしょうか。



**発行** 平成28年12月

**編集・企画** 伯耆町教育委員会  
所在地：鳥取県西伯郡伯耆町溝口647番地  
TEL 0859-62-0927

**参考** 平成22年版  
『家庭教育手帳 中学生(2年生)～中学生卒業後編』  
発行者：文部科学省生涯学習政策局  
男女共同参画学習課家庭教育支援室

**印刷・製本** 有限会社 米子プリント社